

著書紹介 影山太郎 編 『複合動詞研究の最先端 -謎の解明に向けて-』

著者	影山 太郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	5
号	1
ページ	47-48
発行年	2014-06
URL	http://doi.org/10.15084/00000768

影山太郎 編

『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』

2013年12月 ひつじ書房 A5判 viii+451ページ 8,600円+税

影山 太郎



本書は、基幹型共同研究「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」（プロジェクトリーダー：影山太郎）における複合動詞チームの平成25年度の成果の一部で、共同研究者の論考だけでなく、前年の研究発表会で公募した若手研究者の論文も審査の上掲載している。加えて巻末には、これまで国内の研究者に見過ごされていた Charles Kenneth Parker (1939) *A Dictionary of Japanese Compound Verbs* の短評と、本チームで作成したオンラインデータベース「複合動詞レキシコン」（<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp>）の紹介記事も掲載している。

本書が扱うのは、「晴れ上がる」、「駆け込む」、「まくしたてる」といった動詞連用形+動詞型の複合動詞である。このタイプの複合動詞は日本語にとって重要な表現形態であるが、言語学的な観点からすると多くの謎が残されており、日本語教育や辞書編纂、自然言語処理など応用面でも問題が多い。この現象に関する研究のターニングポイントとなった影山太郎『文法と語形成』（ひつじ書房、1993）では統語的複合動詞と語彙的複合動詞の仕組みが初めて明らかになり、それ以来、理論言語学、日本語学、日本語教育、コーパス研究等で多数の文献が国内外で発表されている。しかしいずれも、次のような3つの謎を含め、複合動詞の全体像を解明するには至っていない。

【謎1】複合動詞の理論的な仕組み

語彙的複合動詞の内部構造、および語彙的・統語的の2種類の複合動詞の相互関係はどうなっているのか。

【謎2】複合動詞の歴史

動詞連用形+動詞型の複合動詞は古代語には存在しなかったという金田一春彦(1953)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」の説が正しいとすると、この種の複合動詞はいつ発生したのか。当時の複合動詞は現代語と同じ性質だったのか。

【謎3】外国語との対照

東アジア諸言語には、日本語タイプの複合動詞が存在するのか。それらの性質は日本語とどのように共通し、どのように異なるのか。また、それが外国人の日本語学習にどのように影響するのか。

本書では、これら3つの謎の解明に向けた最先端の研究論文を13篇提示している。まず

謎1に関しては、影山太郎「語彙的複合動詞の新体系」が、従来は統語的と見なされてきたアスペクトの概念が語彙的複合動詞にも存在することを突き止め、語彙的アスペクト複合動詞こそが謎2と謎3の解明に重要な役割を果たすことを示唆している。これを承けて、陳劭憚「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について」は「～出す」を軸として語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続的な関係を論じ、長谷部郁子「複合動詞と2種類のアスペクト」は語彙的なアスペクト複合動詞と従来の統語的なアスペクト複合動詞との類似と相違を論じている。由本陽子「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」は、語彙的複合動詞の意味解釈と生産性にクオリア構造が重要な情報を提供することを論じ、岸本秀樹「統語的複合動詞の格と統語特性」は、統語的複合動詞で他動詞である場合に、目的語の格が前項と後項のいずれによって認可されるかを明らかにしている。山口昌也「複合動詞「～込む」と前項動詞の格関係」は、独自に開発した「Web データに基づく複合動詞用例データベース」(<http://csd.ninjal.ac.jp/comp/>)を用いて、「～込む」の振舞いが理論的分析から得られる予測とインターネット上の実態に合っているかどうかを検証している。

謎2「複合動詞の歴史」では、青木博史「複合動詞の歴史的变化」が古代語を複合動詞化の萌芽期とし、中世室町期頃に前項と後項が「語」としての結びつきを強めたとする。阿部裕「古代日本語における動詞接続「トリー」の様相」は中古語において他動詞「トル」を前項にとる動詞接続を整理し、多くが複合動詞として確立していたと見る。

謎3「外国語との対照」では、まず、栗林裕「V+V型複合動詞と語形成」がトルコ語における複合動詞の様相を略述した後、韓国語に関しては、塚本秀樹「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相」が韓国語でアスペクト複合動詞に当たるものが少ないことを指摘したのに対し、全敏杞「韓国語の語彙的複合動詞におけるアスペクト複合動詞について」は「V-nata」「V-nayta」「V-tulta」を語彙的なアスペクト複合動詞と分析している。中国語については、沈力「結果複合動詞に関する日中対照研究」が、手段・様態を表す日本語の語彙的複合動詞に対応するものとして中国語の結果補語複合動詞を取り上げて統語的な分析を示し、玉岡賀津雄・初相娟「中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する要因」は、中国人日本語学習者を対象とする実験により、語彙的複合動詞の習得における問題点を、前項の難易度、後項の他動性、複合動詞の抽象性、日本語学習期間という4つの要因で分析している。

影山 太郎 (かげやま・たろう)

国立国語研究所長。Ph.D. (言語学) (南カリフォルニア大学)。関西学院大学名誉教授。2009年10月より現職。
 主な著書：『文法と語形成』(ひつじ書房, 1993), 『動詞意味論』(くろしお出版, 1996), 『ケジメのない日本語』(岩波書店, 2002), 『属性叙述の世界』(編著, くろしお出版, 2012), *The Oxford Handbook of Compounding* (分担執筆, Oxford University Press, 2009)。

受賞：市河賞(財団法人語学教育研究所, 1980), 第22回金田一京助博士記念賞(金田一京助博士記念会, 1994)。
 社会活動：Oxford Research Encyclopedia of Linguistics (Advisory Board), 日本言語学会顧問(前会長)・評議員・元『言語研究』編集委員長, 日本語学会評議員, 財団法人日本国際教育支援協会理事, 特定非営利活動法人言語資源協会理事。